



犬の混合ワクチン接種のご案内



ワクチン接種前に必ずお読みください

混合ワクチンの種類

1. 犬ジステンパーウイルス感染症
2. 犬伝染性肝炎
3. 犬アデノウイルス2型感染症
4. 犬パラインフルエンザウイルス感染症
5. 犬パルボウイルス感染症 5種混合ワクチン
6. 犬コロナウイルス感染症 6種混合ワクチン
7. 犬レプトスピラ感染症（黄疸出血型）：人畜共通感染症（家畜伝染病予防法 届出伝染病）
8. 犬レプトスピラ感染症（カニコラ型）：人畜共通感染症（家畜伝染病予防法 届出伝染病）
8種混合ワクチン



ワクチン接種までの手順

1. 問診（体調や病歴の確認）
副反応の病歴がある患者さんは、事前にお申し出ください。

副反応の例

注射部位の腫脹や疼痛、顔面腫脹（ムーンフェイス）、発熱、掻痒（かゆみ）、下痢、嘔吐、食欲減退、アナフィラキシーショック、後駆麻痺、死亡例も報告されています。

2. ワクチン接種前の身体検査
3. ワクチン接種
4. ワクチン接種後に、待合室やお車などの安静にできる場所で **20分以上体調を観察**してから帰宅していただきます。（病院から出るときはスタッフまでお声かけ下さい）
5. ご帰宅後は、下記の注意点を厳守してください。
 - ・ 2-3日は安静に務め、シャンプーや激しい運動は避けてください。
 - ・ フロントラインやフィラリア予防薬などの投薬は、2-3日してから行ってください。

過去に副反応を経験した場合

1. ワクチンの種類を見直し、適切なワクチンを接種します。
2. 副反応を起こりにくくするお薬を、事前または同時に投与してワクチン接種を行うことがあります。
3. 事前に代表的な感染症のワクチン抗体を測定し、感染症発症防御能を判定することがあります。
4. ワクチン接種を避けます。

下記の患者様は予防接種を避けます

1. 身体検査で、健康状態に問題があったり、老齢でワクチン接種が困難とみなされた場合。
2. 免疫抑制剤などワクチンに影響する治療を受けている。
3. てんかん発作の既往歴がありコントロールできていない場合。
4. 過去に重度の副反応が認められた場合。
5. 狂犬病ワクチンなど不活化ワクチンを接種して1週間に満たない。
6. 混合ワクチンなど生ワクチンを接種して1ヶ月に満たない。
7. 過剰に興奮し抑止が出来ない。
8. ワクチン接種後に動物の様子を観察できない。
9. 妊娠中、発情中、授乳中、アレルギー体質。
10. 病院の受付時間が残り30分に満たない時間帯の接種はお勧めしかねます。



裏面をご覧ください

参考資料

混合ワクチンの使用説明（ワクチン使用説明書から一部抜粋）

【用法及び用量】

犬の皮下又は筋肉内に1mlを注射する。

【犬に対する注意】

1 制限事項

- (1) 妊娠犬には使用しないこと。
- (2) 3ヵ月齢以下の若齢犬では副反応の発現頻度が高いため、接種適否の判断をさらに慎重に行うとともに、経過観察を十分に行うこと。
- (3) 本剤の接種前には健康状態について検査し、次のいずれかに該当すると認められた場合には、接種しないこと。
 - ・重篤な疾病にかかっていることが明らかなもの。
 - ・以前に本剤又は他のワクチン接種により、アナフィラキシー等の異常な副反応を呈したことがあることが明らかなもの。
 - (4) 対象動物が、次のいずれかに該当すると認められる場合には、健康状態及び体質等を考慮し、接種の適否の判断を慎重に行うこと。
 - ・発熱又は下痢等の臨床異常が認められるもの。
 - ・アレルギー体質であるもの。
 - ・疾病の治療を継続中のもの又は治癒後間がないもの。
 - ・以前の予防接種で異常が認められたもの。
 - ・寄生虫の感染があるもの。
 - ・発情中又は授乳中のもの。
 - ・明らかな栄養障害があるもの。
 - ・飼い主の制止によっても沈静化が認められず、強度の興奮状態にあるもの。
 - (5) 本剤を接種後、副反応（アナフィラキシー等）による事故を最小限にとどめるため、接種後しばらくは観察を続けること。帰宅させる場合は、なるべく安静に務めながら帰宅させ、当日は帰宅後もよく観察するように指導すること。
 - (6) 本剤の接種後2～3日は安静に務め、シャンプーや激しい運動は避けるよう指導すること。

2 副反応

- (1) 本剤の接種後、まれに一過性の元気・食欲減退、疼痛、腫脹、発熱、嘔吐、下痢等を示すことがあるので、接種後十分に観察を行うこと。
- (2) 過敏な体質の犬ではまれにアレルギー反応〔顔面腫脹（ムーンフェイス）、掻痒、じんま疹等〕又はアナフィラキシー反応〔ショック（虚脱、貧血、血圧低下、呼吸速拍、呼吸困難、体温低下、流涎、ふるえ、けいれん等）〕が起こることがあるので、接種後しばらくは注意し、観察すること。
- (3) 副反応（アナフィラキシー反応等）が認められた場合、速やかに獣医師の診断を受けるように指導すること。又、副反応に対しては適切な処置を行うこと。

3 相互作用

本剤には他の薬剤を加えて使用しないこと。

4 適用上の注意

- (1) 移行抗体を保有している子犬あるいは免疫抑制剤を用いて治療された犬はワクチンの効果が阻害されることがあるので接種時期を考慮すること。
- (2) 潜伏感染の状態の犬に接種した場合、その疾病を誘発することがあるので注意すること。
- (3) 注射器具は、乾熱、高圧蒸気又は煮沸等で滅菌したもの、又は市販の滅菌済みのものを用い、薬剤により消毒した器具又は他の薬剤に使用した器具は使用しないこと。なお、乾熱、高圧蒸気又は煮沸等で滅菌を行なった場合は、室温まで冷えたものを用いること。
- (4) 接種部位は70%アルコールで消毒し、接種時に注射針が血管に入っていないことを確認してから接種すること。
- (5) 注射器具は1頭ごとに取り替えること。
- (6) 接種後、免疫が得られるまでの2～3週間は犬同士の接触を避けること。
- (7) ワクチン接種後、犬パルボウイルスについては一過性のウイルス排泄が認められるが、ワクチンウイルスの安全性については確認されている。



七里動物病院

埼玉県さいたま市見沼区東門前 17-9

TEL: 048-687-2490【受付時間】AM9:00～11:00・PM4:00～6:00

<休診日> 火曜、日曜午後、祝日午後、第3木曜午後

どうぶつの総合病院 救急救命科 夜間診療部

埼玉県川口市石神815（R122号沿い）

☎ 048-229-7299 【受付時間】21:30～翌3:00

裏面をご覧ください